

平成3年度 赤塚山古窯跡発掘調査の概要

これまでの試掘調査により、赤塚山周辺には古墳2基、瓦窯2基があることが明らかとなっています。

今回調査を行なったのは、赤塚山第1号窯西側山裾のD地点と呼ぶ場所ですが、厚い赤土の下から瓦窯に関連した工房跡が思いがけず発見され、急ぎよ発掘調査を行なったものです。

こうした一連の調査により、赤塚山南麓では奈良時代末から平安時代中ごろにかけて国分寺や国分尼寺の瓦が焼かれ、また瓦の製作もここで行なわれていたことが明らかとなりました。

I、各地点の概要

1、A地点

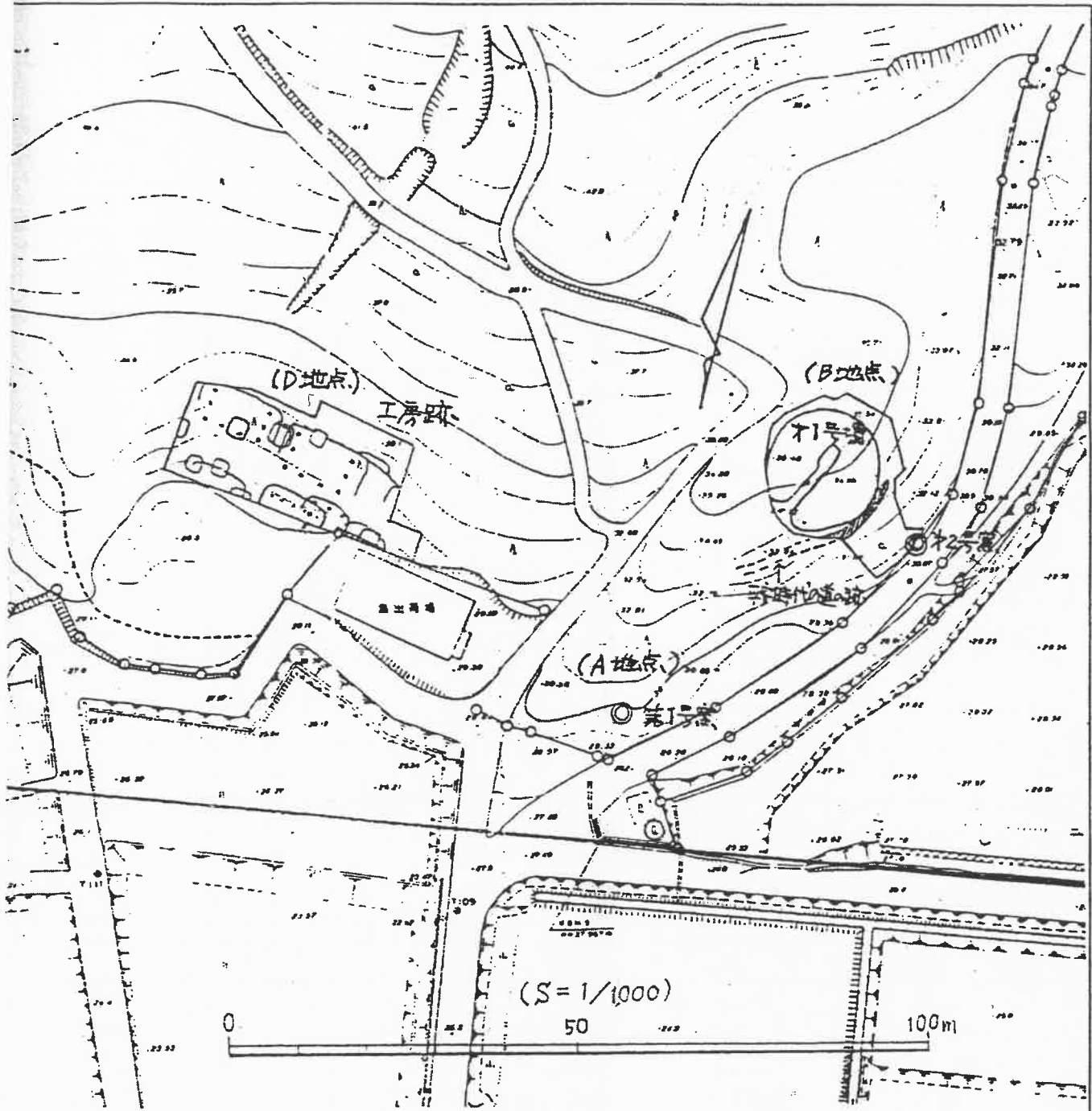
平成2年7月の試掘調査により、奈良時代末から平安時代初頭頃のロストル式平窯1基(第1号窯)があることが確認されました。ちょうど「赤塚山窯跡」の石碑の西側あたりです。

2、B地点

平成3年12月の調査により、6世紀末から7世紀にかけての古墳1基(第1号墳)と、平安時代中ごろのロストル式平窯?1基(第2号窯)が確認されています。古墳と窯の間には、幅約1mの瓦を敷いた平坦面が東西に延びており、もしかしたら窯跡と瓦の工房跡(D地点)を結ぶ作業用の道の跡になるかもしれません。

3、C地点

平成3年10月の試掘調査で、東池北東の低丘陵先端に6世紀中ごろの円墳があることが確認されました(赤塚山東池古墳)。



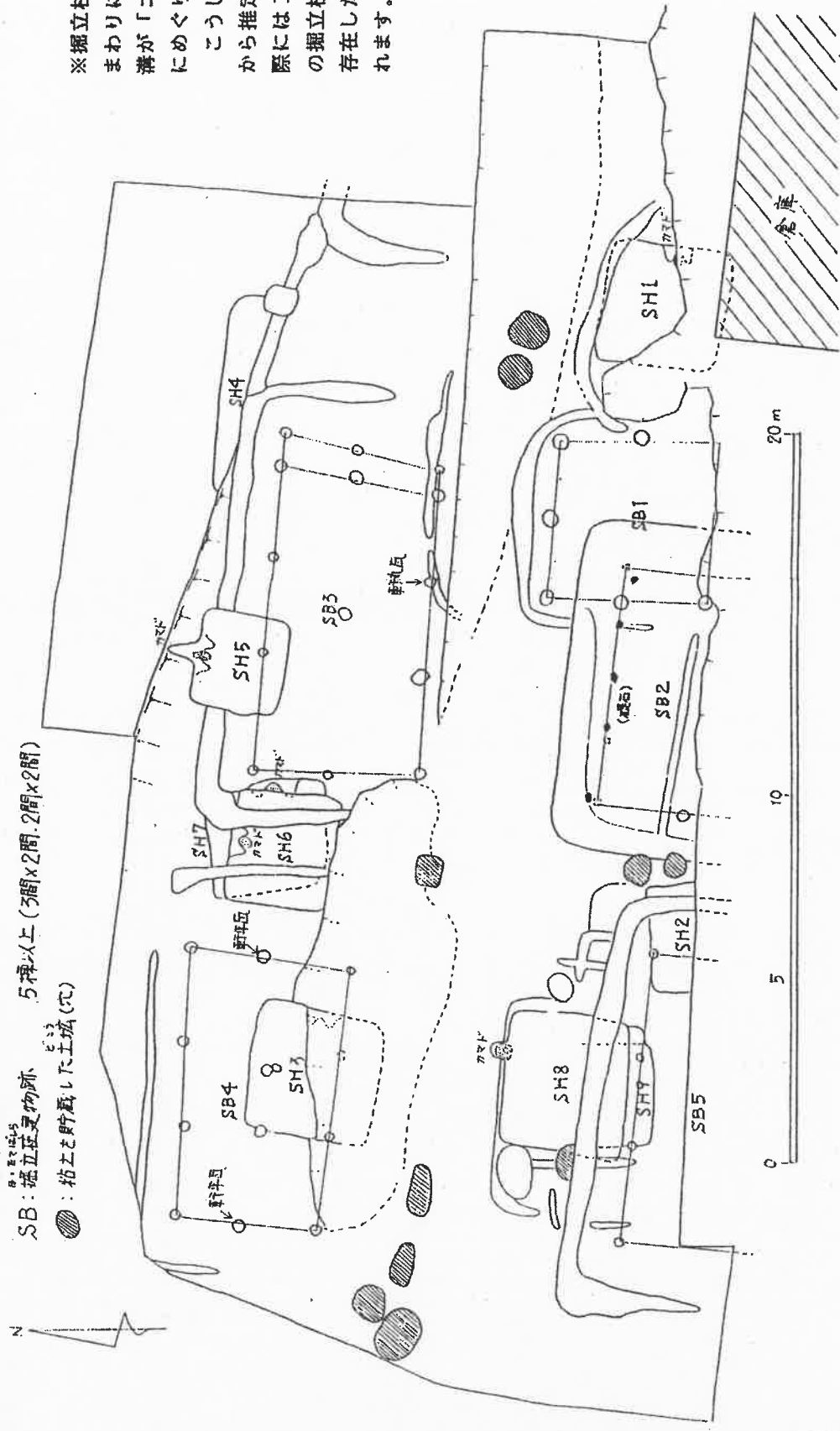
赤塚山古窯跡周辺

4、D地点

今回の調査地点です。約600㎡の調査を1月18日から実施しており、奈良時代末から平安時代中ごろの瓦屋（かわらや：瓦生産の場）と推定される遺構が発見されています。

SH: 竪穴住居跡、9棟
 SB: 竪立柱建物跡、5棟以上 (3間×2間、2間×2間)
 ●: 粘土と貯蔵した土城(穴)

※ 竪立柱建物跡のまわりには、排水溝が「コ」の字形にめぐります。こうした溝の数から推定して、実際には10棟以上の竪立柱建物跡が存在したと考えられます。



II、確認された遺構

今回の調査区で検出された遺構は、すべて奈良時代後半から平安時代中ごろにかけてのもので、約200年の間に建物が何度も建て替えられていることがわかります。

最初には竪穴住居のみで、普通の集落が営まれていたようですが、奈良時代末頃になると竪立柱建物がいくつも建てられ、赤塚山瓦窯の工房として瓦の製作などが行なわれたようです。

竪立柱建物跡は上下2段に分かれて並んでおり、建物跡の間には、採掘してきた粘土を貯蔵したと推定される土坑がいくつも発見されています。また、竪穴住居廃絶後の凹地からも粘土が多量に出土しました。

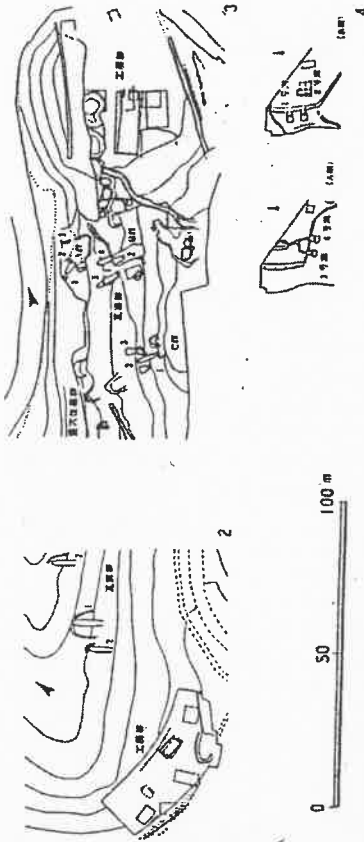
Ⅲ、瓦窯関連工房跡の類例

古代の瓦屋（瓦の生産にあたった現地組織）を実証する発掘調査例は意外と少なく、全国でもまだ十例ほどしか知られていません。近年調査の行なわれた京都府上人ヶケ平遺跡は、平城宮へ瓦を供給した宮営工場の具体相を明らかにする遺跡として注目をあびましたが、地方の寺院の瓦の実態については、まだよくわかっていないのが現状です。

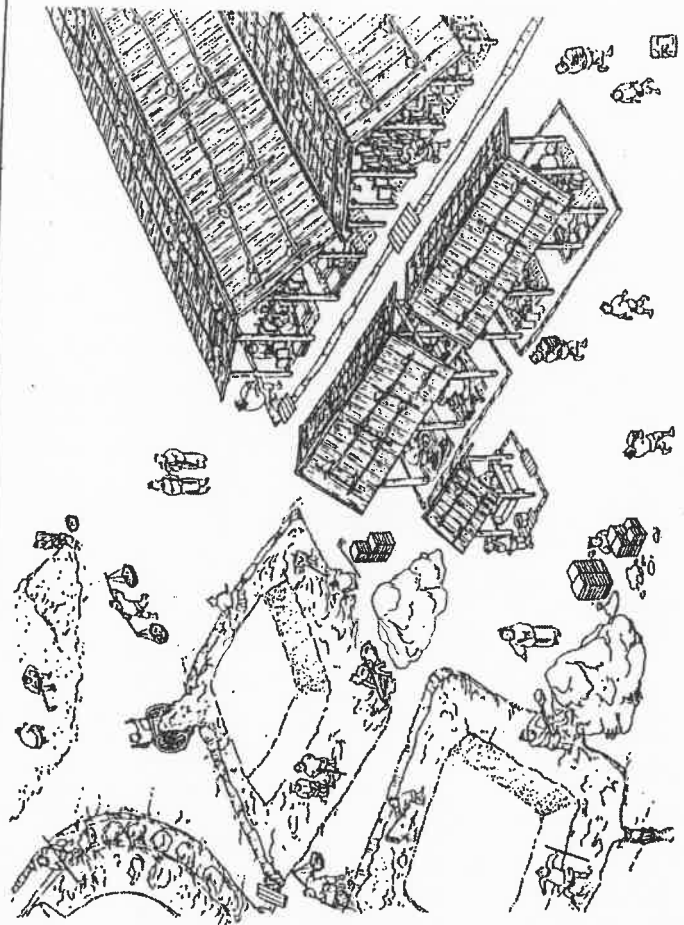
そうした意味で、この遺跡は三河国分二寺の瓦生産の様相、あるいは国分二寺の建て替え・修理などを考える上での貴重な遺跡といえます。

瓦屋調査例一覧（上人ヶケ平遺跡は含まれていません）

富山県教委 1984 「小波遺跡発掘調査報告書 第6次緊急発掘調査報告書」より



遺跡名	所在地	時代	供給先	検出遺跡
1 小波遺跡	富山県小波町小波	白土古墳群(7世紀)	白土古墳群(7世紀)	瓦窯跡1・須恵器窯跡1・聖穴住居跡1・柱状遺跡1・須恵器窯跡2・土止
2 早上り遺跡	京都府宇治市早上り	奈良(7世紀前半)	聖徳寺	瓦窯跡1・聖穴住居跡1・柱状遺跡1・須恵器窯跡3・聖穴住居跡2・土止
3 西木原遺跡	滋賀県大津市西木原	白土古墳群(7世紀前半)	南法興寺	瓦窯跡10・聖穴住居跡1・土止2・聖穴住居跡1・聖穴住居跡2
4 香如ヶ谷遺跡	京都府相模野本町	奈良古墳群		瓦窯跡1・聖穴住居跡1・土止1・聖穴住居跡2・土止2
5 乙女不動遺跡	所沢市小山町乙女	奈良古墳群	下野遺跡寺	瓦窯跡1・聖穴住居跡1・土止1・聖穴住居跡2・土止2
6 神明比賣遺跡	宮城県仙台市青葉区	奈良古墳群	平家坊	瓦窯跡1・聖穴住居跡1・土止1・聖穴住居跡2・土止2
7 所江遺跡	宮城県仙台市青葉区	奈良古墳群	平家坊	瓦窯跡1・聖穴住居跡1・土止1・聖穴住居跡2・土止2
8 権の寺瓦窯跡	茨城県鹿嶋市権の寺	奈良古墳群	平家坊	瓦窯跡1・聖穴住居跡1・土止1・聖穴住居跡2・土止2



上の絵は、上人ヶケ平遺跡の発掘調査の成果をもとに、瓦生産の一連の工程が描かれたものです。瓦作りは粘土の採掘から始まり、土打ち（粘土の水分を抜き、粘土を小さくすする作業）を行い、その後砂や水を混ぜ、成形しやすい粘土に加工します。粘土はぬかしたりこねたりしたあととはじめて製品に仕上げられ、乾燥のち窯で焼かれます。

今回の調査地点は、原料となる粘土が出土していることから、掘立柱建物の内外で、そうした作業のいくつかがなされていたと推定されます。粘土はおそらく付近で採掘したものと想定され、焼かれた瓦は、約2km離れた三河国分寺・国分尼寺に運ばれました。

- 工房跡 (現調査地) 出土
- ①: 第1号窯灰原出土
- ①: 第1号窯付近出土
- ②: 第2号窯焼成室出土
- ②: 第2号窯付近出土

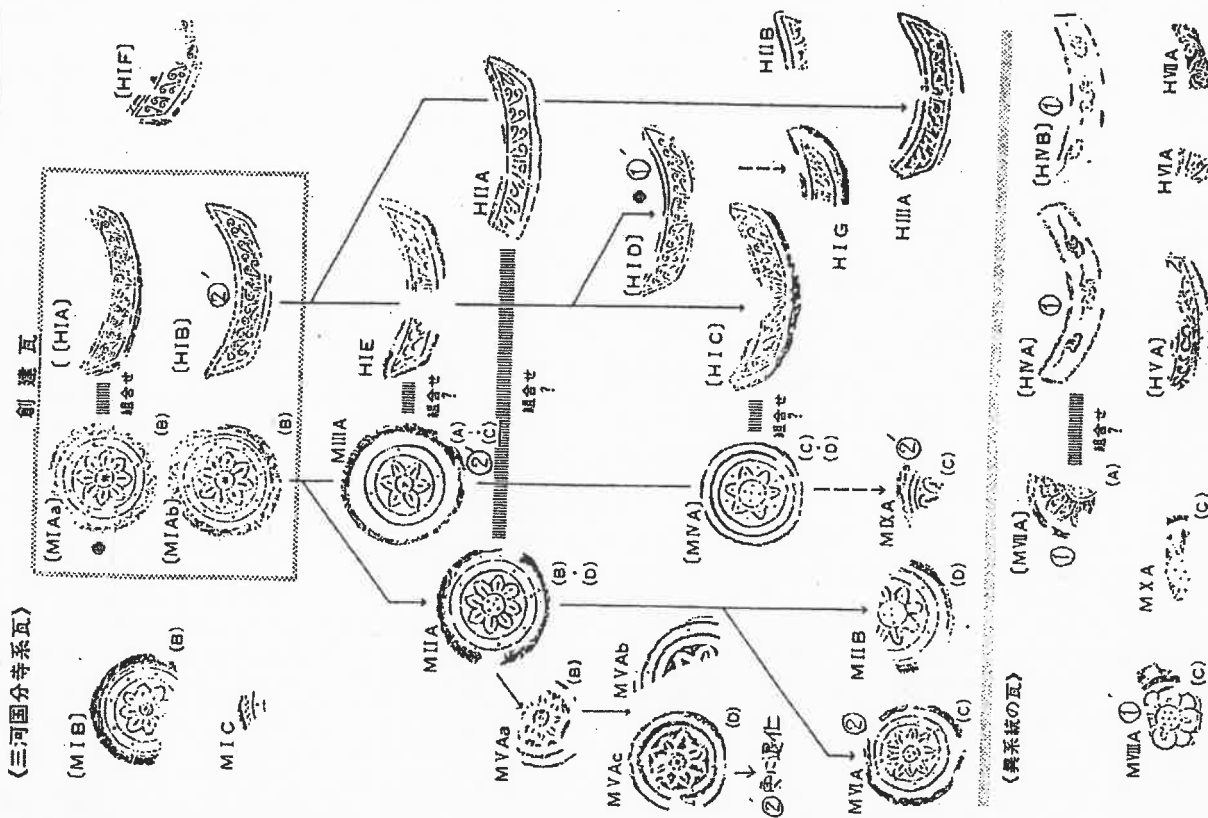
ロストル式平窯: 奈良時代
みんじょう
 (京都府音如ヶ谷瓦窯第1号窯)

IV、出土遺物

今回の調査地点における出土遺物は非常に少なく、瓦や須恵器、土師器などあわせても、コンテナ約10箱ほどです。軒瓦は、創建瓦とされる単弁8葉蓮華文軒丸瓦が1点と、やや型崩れのした均整唐草文軒平瓦が2点出土しただけですが、これまでの赤塚山瓦窯の調査では、創建瓦は出土しておらず、9世紀代と推定される建物跡の柱穴の中から何故創建瓦が出土したのかは不明です。

これまでの調査結果では、赤塚山では創建瓦は焼かれておらず、奈良時代末以降の国分二寺の建て替え、修理などの際にここで瓦が生産されたと推定されますが、もしかしたらまだ確認されていない創建瓦の瓦窯がこの付近にあるのかも知れません。

いずれにせよ、今後、窯跡本体や、この工房跡との中間地点の調査を行なう予定ですが、そうした一連の調査の後には、この赤塚山瓦窯における瓦生産の実態が、より鮮明になると期待されます。



* 各型式を〔 〕で囲んであるものは、三河国分寺で同瓦が出土
 * 軒丸瓦右下の〔 〕内は、瓦当部製作技法を示す。

三河国分寺所用軒瓦の変遷 (試案)